

「ヴォイツェク」(ビューヒナー)

十九世紀末葉のドイツ。三十歳のヴォイツェクは極貧ごくひんの下層階級げうに屬する一兵卒で、町に住む未婚の妻マリーと赤兒とを養ふべく、兵營に住み寸暇すんかを惜しんで働いてゐた。軍務の傍ら上官の大尉の髭を剃つて些少の金を貰ひ、醫者の「實驗動物」となつて長期間エンドウ豆のみを食して僅かな手當にありつき、兵營での食費を浮かして貯めた金を最愛のマリーに貢みついでゐたが、生活に餘裕はなく、何物かに背後から追はれてゐる脅迫觀念に取憑とかれてゐた。

今日も大尉の髭を剃つてゐると、大尉が云ふ、「ゆつくりやれ」、貴様が「年中せきたてられたやうに」してゐるのは「良心よまに疚やしい」處があるからだ、大體「貴様にはモラルつてもものがない」、教會の祝福も受けずに所帯よまを持ち子供迄拵やへるとはな。

するとヴォイツェクが答へる。貧乏人が餓鬼を「道德的に」拵やへるなんて無理でさあ、檀那だんな衆の様に「帽子や時計や禮服を持ち上品な口がきけ」るのならば自分もぜひ「道德的になつて

みたい」ものですが、何せ素寒貧すかんびんですからな。

そんな或日、器量良しのマリーは下士官の鼓手長に目を附けられ、寶石のイヤリングを贈られて、疚しさを覺えつつも鼓手長に惹かれて行き、二人は男女の仲となる。それと知つた大尉が女の不貞をヴォイツェクに仄めかす。ヴォイツェクは蒼白になつて叫ぶ、自分は「この世に女房以外は何も持つてゐないのであります」、「畜生！ 畜生！ そんなわけがあるもんか」。

ヴォイツェクは女の許に急ぎ、その顔を穴の開く程見詰めて罪の確かな證據しやうこを探さうとするが、見出せない。彼は云ふ、「人間は誰でも彼でも深い淵だ、覗き込むとめまひがする」、「お前にはしるしがついてゐるはずだ。俺にはそれが見えないのか？ 分からないのか？ 誰に分かるんだ？」

だが、やがてマリーが鼓手長と身體を寄せ合ひ樂しげに休日の街を踊る姿を彼は見て、「神様はなぜ太陽を吹き消してしまはないんだ」、さうなれば誰もが「淫みだらに重なり合つて踊」れるのに、「男と女、人間と獸が」と叫んで卒倒する。その後、ヴォイツェクの耳には「刺し殺せ、刺し殺せ」といふ聲が頻りに聞え、ナイフが眼前にちらつき、遂に彼は女を夜の町外れの池に誘ひ出し、ナイフで滅多刺めつたぎしにするが、血に塗れた己れの身體を洗はうとして池の深みに

入つて行き、自らも溺れ死ぬ。

「ヴォイツェク」は「下層生活を扱つた眞の悲劇の嚆矢」といふべき作品であり、「悲劇的苦惱は高位者の暗鬱な特權」だとのギリシヤやシェイクスピア悲劇の「暗黙裡の主張に異を唱へてゐる」とG・スタイナーは「悲劇の死」に書いてゐる。實際、ヴォイツェクは「高位者」たる王でも王子でもないどころか、大尉程度の持てる者の安逸や上品ぶりすら奪はれてをり、遂には唯一己が持物たる妻すら失つて了ふ。さういふ持たざる者の苦惱の中でヴォイツェクが直面するのは、「ダントンの死」でも描かれた、互ひに「深い淵」たる人間同士の孤絶であり、それに何より、太陽の火が吹き消されて了へば淫欲に驅られて「獸」の本性を剝出しにかねぬ男女の性的頹廢の現實であつた。そして、やはりスタイナーが指摘する様に、ビューヒナーはこの作品を執筆するに當つて「リア王」に負ふ處が少からず、二作品を並べてみると、明らかに呼應し合ふ箇所が少からず見出せるのだが、もはや紙幅もほぼ盡きた。最後に一言。ビューヒナーの同時代人のメルヴィルが「白鯨」執筆に當つて苦闘したのは、王侯貴族無きアメリカで「悲劇的苦惱」を描く事の頗る附きの困難であり、且つ又彼も「眞實の探究者」シェイクスピアの大的崇拜者であつた。

(岩淵達治譯、岩波文庫)